

# 表紙 の 説明

## 松本城(連結複合式天守)について



表紙上段は、「松本城」二の丸南側から内堀越しに撮影した冬の松本城天守群で、下段は本丸東側から地上型レーザスキャナで計測した3次元データから作成した松本城天守群の鳥瞰図です。両画像から大天守、乾小天守、渡櫓、月見櫓からなる連結複合式天守の構造がよく分かります。

### ■表紙画像のご提供先

「冬の松本城天守」—————瀬戸島政博(筆者)

地上型レーザ画像—————株式会社協同測量社  
〒380-8577 長野県安茂里671番地 Tel: 026-226-5691  
使用機器: RIEGL社製 LMS-Z620(ステップ角度0.030°)

松本城は長野県中央部に位置する松本平の低地に構築された平城です。信濃の守護小笠原氏は林城(松本市内)を居城に、松本城(深志城)をその支城としました。その後、甲斐の武田信玄が小笠原長時を追い、この地を支配し、深志城を信濃領国の経営拠点としました。武田氏滅亡後は織田氏の支配下となりましたが、天正10(1582)年の本能寺の変による動乱の虚に乗じて小笠原貞慶が失地を回復し、深志城を松本城と改めました。

豊臣秀吉の天下統一後、松本城には石川数正が入城し、数正・康長父子によって城と城下町が整備されました。慶長18(1613)年に石川康長が改易となり、以降、小笠原氏、戸田氏、松平氏、堀田氏、水野氏、戸田氏と目まぐるしく城主が替わり、明治維新を迎えました。

松本城は現存する天守を有する12城の一つで、その天守は、姫路城・犬山城・彦根城とともに国宝に指定されています。

松本城の大天守は、姫路城とともに全国で二基しか現存しない五重の天守で、外観五重で内部六階の構造となっています。五重の大天守は、石川康長の改易後の創建と考えられ、小笠原時代の慶長20(1615)年頃の完成と推定されています。

松本城の天守群は、この大天守を中心に乾(いぬい)小天守と渡櫓(わたりやぐら)で連結し、辰巳附櫓(たつみつけやぐら)と月見櫓を複合した「連結複合式」と呼ばれています。そのため見る方向によって様々な天守の構造が見られます。

図-1は南側から内堀越しに見た

天守群で、大天守の右には辰巳附櫓と月見櫓が見えます。図-2は西側から内堀越しに見た天守群で、大天守の右には辰巳附櫓と月見櫓、左には乾小天守が見えます。図-3は北側から外堀に架けられた朱色の埋橋(うずみばし)越しに見える天守群で、大天守と乾小天守が渡櫓で連結されているのが分かります。図-4は本丸内の東側から見た天守群です。この方向からは連結複合式の天守群の構成がよく分かります。大天守を中心に右に渡櫓と乾小天守、左に辰巳附櫓と月見櫓を従えています。

大天守には窓が少なく、矢狭間や鉄砲狭間、石落しが数多く設けられています(図-1)。とくに、石落しは初層の四隅に設けられる場合が多いのですが、松本城大天守ではその中間にも設けられ、実戦を想定とした天守であったことが分かります。また、天守台の石垣は野面積みを主として、隅石には算木積みが用いられています(図-5)。

月見櫓(図-5)は、松平直政が辰巳附櫓とともに増築したとされ、ヒノキ材を主として用い、マツヤツガを主とする天守の用材とは異なります。内部は吹き放ち式の開放的な部屋で、名月観賞の宴



図-1 南側から見た天守群



図-2 西側から見た天守群



図-3 北側から見た天守群



図-4 東側から見た天守群



図-5 大天守の石垣と月見櫓



図-6 復元された太鼓門

が催されたようです。また、二の丸の正門にあたる太鼓門が平成11(1999)年に復元されました(図-6)。図-6の太鼓門左には玄蕃石と名付けられた巨石があります。これは石川康長が嫌がる人夫を斬って運搬を督励した伝えに因んで名付けられたようです。

松本城の天守群の外壁は、軒下の部分だけが白漆喰(しろしっくい)仕上げで、下部(壁の2/3)は下見板張りの黒漆塗りとなっています。北アルプス連峰を背景に漆黒と白漆喰の天守が凛として聳え立つ美しい姿は私たちに大きな感動を与えてくれます。

(瀬戸島政博)